enoco[study?]#3　実施報告書

湯川洋康・中安恵一

総 括

参加動機

湯川・中安（以下、私たち）は、一貫して習慣・歴史・習俗をモチーフとした作品を制作している。 歴史学・民俗学などの諸学問の成果に学びリサーチを行い、文脈・素材・意匠などを取り出し、それらを使った彫刻を作っている。とりわけ最近注目していたのが「習慣」であった。自分たちのまわりの人や社会の習慣。それらを対象にするにあたり、enoco[study?] が掲げる社会や他者との関わりを重視するプログラムの方針は、私たちに多くのものをもたらしてくれる機会となるだろうと考え参加した。また、私たちが活動拠点とする大阪でのプログラムであったことも重要な動機であった。

制作構想

私たちは、「習慣、阻害、彫刻」というテーマを設定した。

> そもそも、だいたいにおいて我々人間は習慣に対して無頓着で無自覚である。けれどもそれは、永く社会との関係性の中で続いてきた営為であり、あるいは社会を成立させている正体かもしれない。ごくごく注意すれば、私たちは、生活の中で、あるいは旅先で、あるいは歴史の中で、見慣れぬ習慣を持つ人や、彼らが残した物に容易に出会う。私たちは、社会とのやりとりを通して、そこに潜在しているものに触れることが、一つ制作の大きな動機になる。身の回りの習慣を「習慣」として表面化するのは、習慣を阻害するものと対峙したときである。いつもの習慣が何らかの原因によって不自由となったときにこそ、その行為が自らのごくごく滑らかな身体的実践として浮彫になる。
>
> （応募プランより抜粋）

制作にあたっては、まず大阪を歩き、またそこに暮らす人々との対話によって習慣についてリサーチを行う。それによって浮かび上がった文脈や素材、物質などを収集し、「阻害」というプロセスを通して彫刻を構成することを目指した。

３ヶ月間の取り組みの流れ

(1) リサーチ　－習慣の調査と収集－

・習慣を集める（WEB アンケート、聞き取り調査）【10 ～ 11 月】
・国立民族学博物館への調査【10 月初】
・集めた習慣からいくつかピックアップし、深くリサーチを行う
　ⅰ）釜ヶ崎を歩きアルミ缶集め仕事を交渉する【10 ～ 11 月】
　ⅱ）天王寺動物園へ定期的に訪問し鳥の羽根をもらう【10 ～ 11 月】
　ⅲ）赤い羽根共同募金箱について問い合わせ、募金箱を設置する【11 ～ 12 月】

(2) 考察

・習慣（やその阻害）について社会科学の視座を学ぶ（社会学者への取材：立命館大学 粟谷佳司准教授）【11 月 1 日】
・習慣の彫刻化にむけた意見交換（enoco での中間レビュー）【11 月 29 日】

(3) 彫刻化

・(1)（2）にもとづきいくつかの彫刻を制作【11 ～ 12 月】

(4) 展覧会

・「流暢な習慣」【2016 年 1 月 10 日～ 1 月 30 日】

リサーチと作品の関係

リサーチした習慣を彫刻に結びつける際のキーワードが「阻害」であった。「阻害」をどのように捉えるか。このことが、もっとも時間を費やした点であった。

応募時のドローイング（Fig.1）を見てもわかるように、当初は物質の組み合わせや配置関係に注目した彫刻を想定していた。しかし、この「阻害」というプロセスの考察によって結果的に現れたのは、たとえば羽根をアクセサリーや葉に「見立て」たり、アルミ缶を大量に切り刻み「モザイク化」する表現手法であった。つまり、見慣れすぎていて無自覚なものを「違和感」によって顕在化することが私たちの習慣への「阻害」、という設定である。

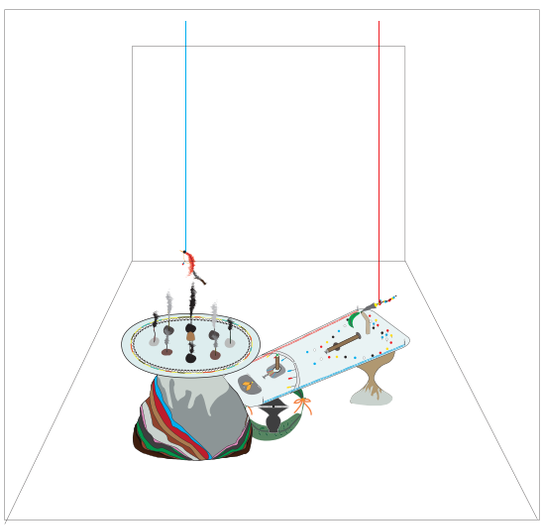


Fig.1 応募時ドローイング

プログラムを通して得たものと今後

私たちがこれまで何度か行ってきたアーティスト・イン・レジデンスのような期間滞在型の制作に比べ、活動拠点大阪での制作であった enoco[study?] は、私たちにとって大きな違いであった。滞在先の不慣れな状況下が持つ刺激に頼らず、見慣れた日常的な状況下で何かを集める作業は習慣を取り上げる上では意義深く、天王寺動物園や釜ヶ崎へ「定期的」に何度も赴き素材を集めるやり方は、私たちにとって制作における新たな社会介入の手立てだったと言える。

このことは彫刻に用いる文脈やメディウムにも反映される。歴史的にあるいは慣習的に人々が物質へ付与した意味（たとえば豊饒性や神秘性や縁起性や境界性）を用いて物質を扱うことが多かったこれまでとは異なり、物質はしばしば私たちと他者との「媒介物」として存在した。物質を扱い続けることで直面する、社会システムあるいは自己や他者との関係性。それらを私たちは身体的に経験した。この新たな経験は大きな収穫であった。

一方で、こうしたプロセスに縛られすぎていく状況にも陥った。私たちは多くの物事に対して順序だてて、倫理的に振る舞うことになり、また作品のコンセプトも論理的に構築していったが、その裏側で何らかの欠落をも感じた。面白みとも言えるのだろうか。それは、一つの物質を見るときに、社会的構造の中での価値・立場・役割といった「位置づけ」にばかり注目がいき、人や場所や記憶や記録つまりその物質が「誰のものか」「どこのものか」という視点がそぎ落とされ、徐々に匿名性を増していったことによるのかもしれない。社会性を帯びたテーマを設定しつつ、こうした匿名性についてつねに意識せねばならないと感じた。とは言え、今回こうした課題が浮かびあがったこと自体に意義があったし、今後の私たちの活動にも活かしていきたいと考えている。

リサーチ

1　習慣を集める

習慣、阻害、彫刻。私たちが設定したのは、身近にある習慣に対して何らかの阻害行為を付与（それは、あまりにも無自覚的な習慣を顕在化させるための行為であり、習慣行為自体を阻害するわけではない）し、彫刻として表現することだった。そのためには、私たちはまず習慣を広く集める必要があった。そしてアンケートや聞き取りをすることにした。

集まった習慣は、個人が決めるルール、心象にもとづく行動、子どもの頃に教わったこと、誰が言い出したともなく社会が作り上げる「良き行為」の慣習化。断片的ではありながらも、私たちの想像していなかった習慣が集まっていった。

その中で、ゴミを捨てることに関する習慣がなぜか多く集まった。私たちは、アルミ缶のリサイクルについて注目することにした。

靴下は右から履く。覚えていないぐらい前から。(60代男）/ 家と駅までの間にある祠に通るたびに手を合わせる。ある時ふとはじめた。おそらく母が余命宣告された時で、苦しい時の神頼みだったのかもしれない。(60代男）/ 家の中ではタバコを吸わない。家の者に怒られるから（50代男）/ 右利きなのに右手に時計をつける。テレビドラマを見て（40代男）/ 子どもに免疫をつけさせるため、３歳になるまでに動物園へ複数回連れて行く / 財布を年に一回取り替える。大学生の時に、金運が上がると雑誌で見たから。(30代男）/ 時計とメガネを着けたまま寝る（お風呂に入ってもまた着ける）(30代女）/ カレンダーにその日聞いた知らない単語をメモする。 / ファーストフードでごみを一つにまとめる。読んだ本で主人公がしていた（20代女）/ ごみを結んだり畳んだりまとめたりして小さくしてから捨てる 、レジ袋をもらわない。中学の時に呼んだ環境の本（30代女）/ 財布のお札入れに、千円札と５千円札＆一万円札を分けて入れる（30代男）/ 朝 家族が家から出掛けて行く際、玄関までちゃんと見送る。気持ちよく、１日の朝の出発を送り出すことが、主婦の大事な役割だ、と母がそうしてきたのを実家で見て育ったから。(50代女）/ 割り箸の使用後は必ず折る。祖母から「三途の橋を渡らないように」使い終わったら箸は折るようにと言われていたので（30代女）/ 空き缶は必ず洗って分別して捨てる

集まったアンケート・聞き取り内容

2　民博のアルミ缶

私たちの作品はいつも、歴史や習俗、習慣の中でテーマを決め、そのテーマにまつわる物質を集めることから始める。まず、私たちは国立民族学博物館に赴き、文化人類学的な視点でどのような習慣にまつわるものが収集されているのかを調査した。それは、私たちの収集行為を客観視し、自覚するためでもあった。

展示物の一つに空き缶のかばんがあった。このセネガルの空き缶細工は、ヨーロッパ人が首都ダカールの木工職人にアタッシュケースを見せて注文したのがきっかけで、木製の衣装箱の外側に空き缶を貼りつけてかばんを作ったという。空き缶細工は、いま観光人類学という枠組みによって対象化され、収集されているようだ。

私たちは、十分にシステム化したリサイクルという社会習慣について考えてみることにした。その是非ではなく、潰し、分類し、プレスして、溶かす過程一つ一つの行為そのものに目を向けることにした。

セネガル・ダカール地域のアルミ缶細工の書類鞄（民博）

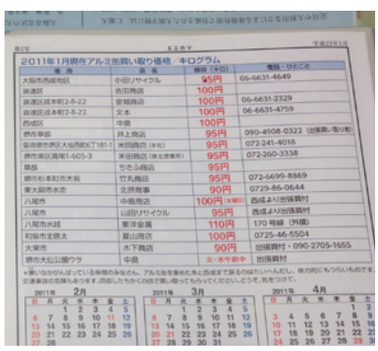
3　釜ヶ崎へ行く

釜ヶ崎にはアルミ缶集めをしている人が数多くいる。それは、アルミ缶集めが一つの社会システム化していることを意味している。私たちはまず、釜ヶ崎支援機構の山田さんを紹介してもらい、釜ヶ崎で空き缶集めの仕事を依頼したいと伝えると、協力してもらえることになった。

山田さんに連れられて私たちは釜ヶ崎を歩いた。山田さんは長年釜ヶ崎に住んでいるので、一緒に歩いているだけでもあちこちから声が掛かる。二、三ヶ所まわり、結局「禁酒の館」という場所を拠点にして集めてもらうことになった。私たちは、民博で見たような綺麗なアルミ缶を集めて欲しいと依頼した。しかし、ここの人たちはいつも、アルミ缶を潰しその重さに応じた対価を得る仕事のやり方をしている。つまり、今回の依頼はこれまでにない新たな仕事であり、新たに相場を設定する必要があった。

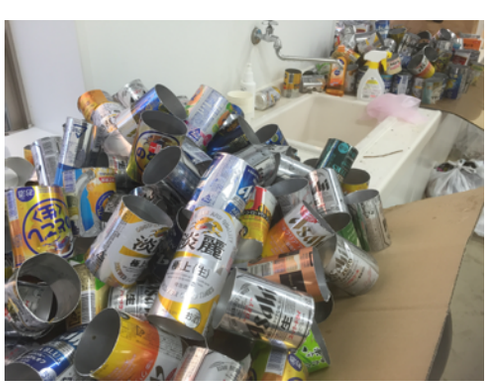
私たちは禁酒の館で話し合い、350mℓ缶で１個５円、500mℓ缶で１個 10 円で買い取ることに決まった。綺麗な状態でありさえすれば、アルミ缶１個あたりの換金相場は通常の仕事より良いので、すぐに集まるだろうというのが山田さんの予想だった。予想通り、２週間程度で 1,000 個集まった。私たちが希望していたのは 500 個だったが、これもまた交渉だった。結局私たちは 1,000 個のアルミ缶を買い取ることにした。

禁酒の館



釜ヶ崎地区のアルミ缶買取価格の相場報知

作成したアルミ缶買取仕事のチラシ


買い取ったアルミ缶

釜ヶ崎を歩いていると、カスタマイズされた自転車をあちこちで見かける。アルミ缶積みに適した改造自転車も多い。荷台は極力多く積載できるように拡張され、また重くなっても安定するように前後輪両方にスタンドを据え付けられて、最適化されている。

山田さんが紹介してくれたいろいろな施設のひとつに「リサイクルプラザ」があった。それは就業支援センターの一つで、譲り受けた放置自転車を解体し、再利用できる部品を使って自転車を作るというものだった。日本製の高品質な部品も多くあって、再製造される自転車は新品に劣らず高性能になるそうだ。自転車やその部品の値段相場の話などもする。

私たちは、この自転車の部品をいくつか借りることにした。

リサイクルプラザで再製造される自転車

改造された自転車

改造された自転車

4　動物園に行く

もう一つ集まった習慣に「免疫をつけるために、子どもを3歳までに動物園へ連れて行くとよい」というものがあった。その内容を周囲の人に話すと、意外にも多くの人が「知っている」と答えたのである。私たちは、噂や迷信めいたものが私たちの習慣に実は深く入り込んでいることを改めて思い知った。菌のような人間にとって不可視なものは、いつも私たちを翻弄し想像力を揺さぶる。

私たちは天王寺動物園に行き、鳥の羽根を集めようと考えた。とはいっても羽根はすぐに集まるものではない。飼育員の方にお願いをした結果、羽根は集めてもらえることになり、私たちはそれを定期的に取りに行った。カモやホロホロチョウ、サギなどの羽根を頂いた。

羽根を取りに行くようになって何度目かのとき、飼育員の方から「最近いくつか鳥が死んでしまったのでその羽根を一緒に取りますか」と提案があったので同行した。行ってみるとその鳥とはフラミンゴとダチョウだった。大きさは1mをゆうに超えている。飼育員さんとともにそれらの羽根をむしり取った。

そして、私たちは羽根を持ち帰り、洗って除菌をし、無菌化する作業を行った。目に見えない菌を扱い、身体的な接近を試みることで私たちは羽根の得体に近づくことが出来るのだろうか。

園内にいたホロホロチョウ

ダチョウ

フラミンゴ

5　募金箱を置く

釜ヶ崎周辺を歩いているとき、ふと目に止まったのが赤い羽根募金のポスターだった。そのポスターには、「赤い羽根共同募金は地域の人々の幸せのために役立てられています」と書かれていた。「地域の人々」とは一体どういう人を私たちは想像できるだろうか。その想像力の程度が、募金という行為の程度をおそらく決める一つの材料になっている。

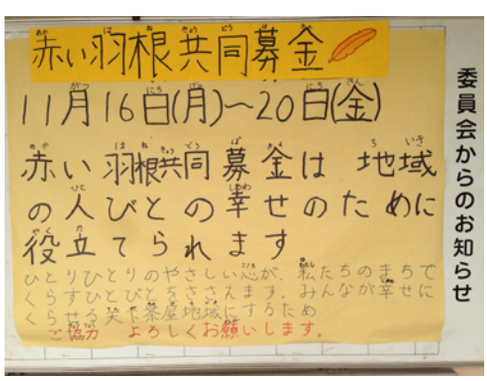
思い起こせば、学校では年に一度赤い羽根共同募金があった。幼少時代自分にどこまで募金という意識があったかはもはや思い出せないが、「募金をしましょう」という空気感と、その証しとしてもらった赤い羽根をみんなが身につけていたことは覚えている。

私たちも募金の場を作ることにした。募金を呼びかける人がいない状況のもと、赤い羽根共同募金の募金箱を enoco の入口にただ設置した。2 ヶ月間の募金額は僅かだった。募金と引き換えに手渡される赤い羽根は大量に残った。私たちはその赤い羽根を自らの募金によって手に入れた。

赤い羽根は、中国のニワトリの羽根を赤い染料で染めたものが使われているようである。天王寺動物園で集めた羽根と並べたとき、私たちはその際だった人工的な不気味な赤さを目の当たりにした。

enoco 入口に設置した募金箱

赤い羽根共同募金の公式ポスター



小学校の掲示板にあったポスター

流暢な習慣
Fluent habit

たとえば、ギリシア神話でイカロスは、蝋で固めた鳥の羽根によって自由な飛行能力を得たが、太陽に近づきすぎたため蝋が溶けて堕落死した。人類の過信と傲慢さの教訓である。きっとイカロスの羽根は、よほど身体に馴染んでいた。そのとき、次第に不安や臆病さは取り除かれ、彼の飛行は流暢になるのだ。

さて、我々人類はだいたいの習慣に対して無自覚である。とは言え、あらゆる習慣は社会と強くあるいは弱く結びつき、その関係性の中で行われる。他者や社会の様子を窺いながら、あるいは反映しながら、もしくは教育付けられながら習慣を身につける。はたして、私たちの習慣は如何にして社会を形作っていくのか、そして社会は如何にして我々に習慣を埋め込むのか。

「免疫をつけるために赤ちゃんの頃に動物園に連れて行く」、「空き缶は洗ってリサイクルの日に捨てる」。私たちはここ大阪に横たわる習慣を集めた。たとえばこのようなアンケートの回答は、私たちの制作の動機となった。私たちは、こうして集めたメディウムやコンテクストの断片からなる彫刻を作る。流暢さへの阻害によって「流暢な習慣」はあるほつれや違和感を生み出す。それは本来的な臆病さをふと思い返す引き金になる。

Ⅰ　リサイクル

いまやリサイクルや分別は、日本ではすっかり定着した。定着とは社会習慣化である。社会習慣化した習慣は、自然と「よき行い」とそうでない行いを区別する。社会習慣はモラルを作りだす。このとき社会習慣の是非が問われることはもはや無く、社会習慣におけるモラルばかりに目が向く。裏返せば、リサイクルや分別を「正しく」するだけで廃棄行為が正当であるという感覚を我々に持たせてくれる。

－
そしてもう一つ、社会習慣化は相場を生み出す。人々の行動が習慣化し、だんだんと流暢になれば、人や物の流れはシステマティックになり、金銭のやりとりは相場として適当なところに落ち着く。相場を作る社会習慣と、それに左右される物質やその価値評価について。私たちがリサイクルに目を向けた動機はここにあった。

－
綺麗なアルミ缶は、確立されたリサイクルの過程では意外にも集まらない。リサイクルされるアルミ缶は通常潰して集めるためである。

－
私たちは、釜ヶ崎地区の人たちへ「綺麗な」アルミ缶集めの仕事を依頼した。通常のアルミ缶集めと異なるこの仕事には、そのアブノーマルさゆえに新たに相場を決める必要があることを私たちは知った。何度か交渉を行った結果、その特殊なアルミ缶集めの相場は定まっていった。やはり相場は、習慣の強弱と関係している。

－
空き缶の意匠は、社会に溶け込みきっている。私たちがあまりにも馴染みきった意匠である。

－
私たちは、集まった空き缶を商品パッケージ化されたアルミニウム片として捉え、用いる。そして、そのイメージを部分的に切断して美的なるものへの還元を試みる。善的なるもの、美的なるもの。現代の消費社会は、それぞれの違和感を教えてくれる。

《アルミニウムサイクル》
アルミニウム片，自転車

Ⅱ　噂と迷信

幼少の頃、町中や自然にいる鳥や動物の羽根は菌を持っているので拾わないように躾けられた。この一方で、「免疫をつけるために、子どもを３歳までに動物園へ連れて行くとよい」という噂・迷信も作りだす。

–
管理された動物園内で免疫を求める姿と、園外の道や池で出くわした羽根を何となく畏れ遠ざける姿。我々は得体の知れなさに対し､いつも都合良く向き合う。それは､我々に日々浴び続ける情報を吟味する猶予や能力がなく、曖昧なまま処理するほかないことを物語っている。親や先生による教育は、ときに自然科学よりも頼れるものとして存在し、我々の習慣として染みこんでいく。

–
私たちは今回、天王寺動物園に通い続け鳥の羽根を集めた。生え替わり時期に落ちた羽根や、死んでしまった鳥の羽根。ホロホロチョウ・ダチョウ・フラミンゴ・カモ・サギ。そして、その羽根を一枚ずつ除菌し無菌化した。私たちは繰り返し羽根に触れながら、得体の知れなさへ身体的な接近を試みる。

–
無菌化のプロセスで得体の知れなさが一つ取り除かれた羽根は、一体何を感受させるだろうか。純粋な美しさか、それとも喪失した意味と現出した存在による魅力のなさか。

《Flutter》
オリーブの木 , 羽根

Ⅲ　募金

大阪の街中を歩き、幾度と目にした募金ポスターの「赤い羽根共同募金は地域の人々の幸せのために役立てられています」というメッセージ。思い起こせば、募金活動は小学校でも必ず年に一度行われていた記憶がある。

－
募金者、募金を呼びかける人、そして「地域の人々」。人は、寄付の現場に立った際、参加可否や金額はこれら関係性の強弱が大きく作用するという。寄付の背後で我々が周囲に示している態度の正体は何か。また、我々が想像する「地域の人々」とは一体どのような人なのか。

－
私たちは、募金の場を作ることにした。募金を呼びかける人がいない状況のもと、赤い羽根共同募金の募金箱をenocoの入口にただ設置した。2ヶ月間の募金額は僅かだった。私たちは手元に残った赤い羽根を自ら募金を行い、手に入れた。

－
そもそも日本では、赤い羽根は社会奉仕のしるしとして一枚だけ手渡される。そしてそれを衣服に身につける習慣がある。装着された赤い羽根は自ずと象徴になる。

－
だが、いつだってそうだが、象徴は意味を変える。たとえば為政者の意図によって、たとえば不特定多数が作り出す空気感によって。赤い羽根は一人歩きができる。

－
記号化した赤い羽根が、染料で赤くした単なる羽根として振る舞われるとき、その羽根は物質として我々の認識に揺さぶりをかける。

《監視員が身につけたもの》
羽根

アーティスト・サポート・プログラム enoco [study?] #3
期間 : 2015 年 10 月 1 日 (日) ～ 2016 年 1 月 30 日 (土)

展覧会
「流暢な習慣」
会期 : 2016 年 1 月 10 日 (日) ～ 1 月 30 日 (土)
会場 : 江之子島文化芸術創造センター 4F ルーム 2 ほか
主催 : 大阪府立江之子島文化芸術創造センター [enoco]
協力 : 大阪市立天王寺動物園、NPO 法人釜ヶ崎支援機構、NPO 法人こえとことばとこころの部屋 (ココルーム)、粟谷佳司 (立命館大学 産業社会学部 准教授)、平石貴士 (立命館大学大学院 社会学研究科)、森本庭苑土木、春日ハジメ、前田香奈 (敬称略、順不同)

2016 年 4 月 10 日
湯川洋康・中安恵一
©Hiroyasu Yukawa・Keiichi Nakayasu, 2016